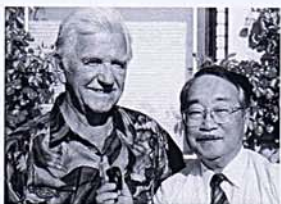




1988年以來、より理想に近い音を求めて新しいケーブルの開発に取り組んでおられる(株)前園サウンドラボ社長の前園俊彦氏。

音の入口だからこそ、粗末にできない。入口こそ高純度であることが大事なのです。

オーディオに半生を捧げてきたゾノトーン/前園サウンドラボの代表取締役社長、前園俊彦さん。S社30年勤務の後、O社の代表取締役を辞するまでの約20年間は、O社を代表するカートリッジ作りに深く携わる一方、高純度ケーブル製作にも強い情熱を注がれた。06年に一旦は第一線を退かれるが、ケーブル製作を請われ、07年に再びオーディオビジネスにリエントリーされた。カートリッジと高純度ケーブルの結びつき。すなわち前園さんの後世は、ナノボルトを扱う微小信号において、いかに高い忠実度を保つかという、アナログオーディオの根源的なテーマへのチャレンジと言い換えることもできよう。そのきっかけは、やはりカートリッジ。「SPURリアレンス」のコイルに、純度99.9999%の6N銅線を用いたことに遡る。



「ミスターSPU」こと、ロバート・グッドマンセン氏(左)との出会いが、高純度ケーブルの開発に取り組みきっかけになったと、前園氏(右)は振り返る。

デンマークに送ったところ、カートリッジ技術者からたいへん優れた線材だという連絡を受けました。その成果によって、生産完了予定だったSPUが生き永らえたんです。高純度銅線のおかげです。また、このときにミスターSPUといわれたロバート・グッドマンセンさんにお会いしたのですが、彼との出会いが、その後の高純度銅線開

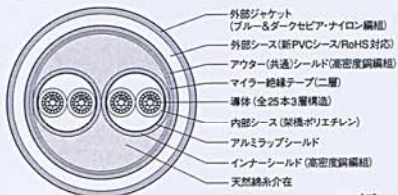
発のスタートにもなったのです」
不純物と結晶境界の問題は、前園さんも一般知識としては知っていた。信号の伝送経路として、導体の純度が高いに越したことはないが、従来のタフピッチ銅やOFCとのスペック上の明確な差や数値的なアドヴァンテージが示せるわけではない。それゆえ、その特質を理解してもらうのにさまざまな苦労や苦難があったという。
「SPURリアレンス」が発売された頃、不純物がさらに少ない7N銅線が同和鉱業によって開発されたことを工業系新聞で知り、「MC5000」に採用。前園さんと高純度導体との関わりがさらに深化するきっかけとなった。この同和鉱業の7N銅線との出会いも幸運だったという。というのも、最初の電話では断られたが、そのときの担当者の上司が偶然にも熱烈なO社ファンで、逆に同和鉱業側からぜひ取り組み

たいと連絡が入ったのだそうだ。以降「エリック・ローマン・シケネチア」「SPUMイスター」「MC7500」「高純度銅採用のカートリッジを毎年製音化。その一方で、8N銅線を用いたトーンアームケーブルなど、ケーブルのラインナップも拡充していった。そうした経緯と実績が、現在のゾノトーンのケーブルにも引き継がれ、息づいている。前職で手掛けられた高純度導体ケーブルが、カートリッジと同様にブランドのシンボリックな存在であったため、ゾノトーンとの相違点はどこにあるのか非常に気になる。
「時代はどんどん進んでおり、材料導体、構造、つくりなどがどんどん進化しています。それらを積極的に採り入れ、進化させているということです。もうひとつ大事なことは、価格です。つまり、「適価」であるということ。前職では、デンマークの親会社のことがあり

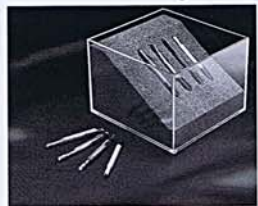
ましたから、少しでも利益をあげなければいけない。しかし、今は最小規模で、しかも僕が自分で欲しいと思うものを作っています。儲けようとは思っていません。同好の人に少しでもお役に立ちたいという想いでやっています。同じ価格のほかのケーブルと比較して原価計算していただければ、いかに僕のケーブルがよい材料を使っているか、すぐにご理解いただけます」
前園さんは言う。オーディオの重要なかつ永遠のテーマは、信号をいかに忠実に、そのエネルギーをロスすることなく伝送するかということ、と。
「だからこそ、もっとも人口に近いカートリッジ周りこそ導体がビュアであることが大事なのです。情報量とエネルギーをいかにきっちり伝送するか。それだけに開発には時間を要しまし

た。純度が高いと、導体内の信号の通過しやすさ、通過するスピードが違うのではないかと僕は思っています。後は、理想の音を求めて、異なる導体や線径のブレンドを耳で作り込んでいく。感性の領域ですね。それが今回のフォノケーブルやリードワイヤーのハイブリッド構造なんです。8N銅を中心に4種類の素材を使い、線径も微妙に変えて、ハイブリッドを極めたみただけです」

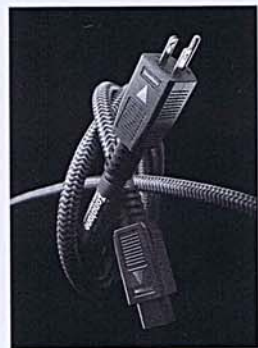
私を感じているゾノトーン・ケーブルの音の特徴は、ローレベルの音がしっかりと出てくること。それは微小信号の実在感にはつきりと出てくる。また、低域の力強さ、エネルギーバランスの安定感も魅力だ。
こういう音の傾向にするには、



ゾノトーンの最新フォノケーブル8NTW-8080 Prestigeと、その構造(断面図)。8N銅を中心に4種類の素材を使い、線径も微妙に変えたハイブリッド構造を採用。



ゾノトーンの最新シェルリード線8NLW-8000 Prestigeと、その構造(断面図)。



ゾノトーンの最新グランディオ・シリーズ電源ケーブル7NPS-5050 Grandioと、その構造(断面図)。

ビクタークリエイティブメディア株式会社 マスタリングセンター マスタリング/レコーディングエンジニア 杉本一家さんの談話



「ゾノトーンのケーブルは、インターコネクトケーブルと電源ケーブル、それと前園さんをお願いして特別にBNC仕様のマスタークロックケーブルも作っていただき、使っています。僕のいくつかあるリアレンスケーブルの中でのゾノトーン的位置づけというのは、クラシックではかなり重宝に使えるという印象です。甘くはない柔らかさや、低域の伸びが感じられます。今日はEMMラボのA/DコンバーターとD/Aコンバーターに使っていますが、相性がいいですね」

「僕のケーブルが絶対とは言わない。僕が作ったケーブルだから、ゾノトーン」という名前が付いているわけで、良くも悪くも僕のキャラクターが出てくるんです。ですから、この音が好きな

人に使っていただき、嫌いと感じられた方に無理矢理売り込むことはしません。ぜひご自身の耳で判断していただきたいと思っています。ただ、僕は作り手がわかるケーブルを世に問いたかったのです」